

二〇世紀初頭における転換期の日本カトリック教会 — 日本人カトリック者とフランス人宣教師との関係を中心に —

EHESS

山梨 淳

「明治」セミナーにおける私の研究報告は、二十世紀初頭のオコンネル教皇庁使節の日本訪問を取り上げ、この出来事が当時の日本のカトリック教会に与えた一連の反響に着目することによって、転換期にあった教会の様相を明らかにする事を目的としている。この教皇庁による使節派遣は、日露戦争の終結後、ローマ教皇ピウス十世（在位期一九〇三—一九一三）が、極東の平和の回復と、戦争中、満州その他の地域のカトリック教会が、日本軍により、保護されたことに対して、明治天皇に感謝の意を表すために行われたものであった。アメリカのポートランド司教であったウィリアム・オコンネル（後のボストン大司教、枢機卿）は、教皇の命を受け、一九〇五年一〇月二九日、随員と共に、横浜に到着し、約一カ月弱の滞在中、天皇や桂太郎首相、小村寿太郎外務大臣などの要人との面会を果たしている。バチカンに帰還後の彼の報告を受けて、教皇庁は、日本にカトリックの高等教育機関を設ける必要性を認め、フランス以外の国の管区から、イエズス会と聖心会を派遣することを決定した。幕末期に再布教が開始されて以来、日本におけるカトリック布教は、二〇世紀初頭に至るまで、フランスのパリ外国宣教会や同会が呼び寄せたフランスの諸修道会に独占的に担われてきたが、このオコンネル使節の訪問は、このようなフランス色の強い教会体制の終わりを告げるものとして、一九〇四年、四国知牧区にスペインのロザリオ管区ドミニコ会の来日に続く、バチカンのカトリック布教政策の転換を象徴する出来事であった。

この教皇使節の訪問は、現在の上智大学や聖心女子学院の創立の機縁になったものとして、同時代の日本人カトリック者からすでに高い評価を受け、また、日本カトリック史の叙述においても、その画期性が強調されてきたといっている。われわれは、教皇使節の訪問にこのような歴史的意義を確認したうえで、さらに、この出来事が、二十世紀初頭の日本のカトリック教会で、醸成されていた日本人信徒の不満を表面化させた出来事でもあったことに注目したいと考える。

一九世紀末になると、日本のカトリックの教勢は、停滞状況に陥っており、二〇世紀初頭には、日本人カトリック信徒の中に、パリ外国宣教会が独占的に布教を行ってきたカトリック教会の現状に不満を抱く者があらわれていた。本論は、特に、東京大司教区初の日本人司祭であった前田長太や、彼が指導するカトリック青年会の活動を取りあげ、彼らの活動が、当時、フランス人宣教師の指導下にある教会体制と軋轢を引き起こしたことに着目したい。日露戦争前後の時期、日本人カトリック者が、主体的に行っていた青年運動や出版活動が、フランス人宣教師らの活動と齟齬を来すことになった背景には、宣教師と

日本人カトリック者の間で、日本の宣教に対する見方において、疎隔が生じていたことが、一因であったことは明らかである。パリ外国宣教会は、一枚岩ではなく、日本人の若手カトリック知識人の活動に期待を寄せるフランス人神父らも存在したが、このような進歩的な考え方もつ宣教師は少数派であった。日露戦争期から戦後の一時期にかけて、東京大司教区の日本人カトリック者らが、一部の宣教師と協力して展開したこれらの宣教活動は、やがてパリ外国宣教会上層部の忌避するところとなり、蹉跌を余儀なくされるが、この出来事は、一過性の事件に止まらず、後々まで、大司教区のカトリック教会の活動に傷跡を残したように思われる。私たちは、この転換期における教会関係者の動向の考察を通して、明治期のカトリック教会の性格をうかがうことができるであろう。

1. パリ外国宣教会と日本カトリック教会

昨年、創立三五〇周年を迎えたパリ外国宣教会は、フランス語を母語とする司祭を成員とする宣教会として、一七世紀中葉に設立された男子修道会であり、現在に至るまで、アジアの諸地域（中国、韓国、ビルマ、ベトナム、カンボジア、インドなど）を舞台に、布教活動を展開してきた。カトリック再宣教のために、一八四四年に那覇へ上陸したフォルカード神父を皮切りに、幕末、宣教師らは、フランスの外交使節の通訳として、日本本国への入国を果たし、一八六五年の長崎浦上の潜伏切支丹の発見以降、秘密裏に宣教師らは、彼らへの司牧活動を開始していった。しかし、その活動は、長崎の信徒の弾圧を招き、宣教師たちが、布教活動を日本各地で、開始できるようになったのは、維新政府によって引き継がれていた弾圧が、西洋列強の抗議で終わりをつげた明治七年以降のことである。

パリ外国宣教会の宣教師は、一六・一七世紀の日本で活躍した宣教師の継承者としての自覚を持って、布教活動をおこなっていたが、彼らを取り巻く環境は、キリシタン時代と大きく異なっていた。彼らは、英米のプロテスタント諸派やロシア正教の宣教師と対立しながら、布教活動を行わねばならず、また、急速に近代化の道を走っていく日本で、彼らは、西洋社会と同様の反キリスト教的な近代思潮と直面することになった。

明治時代は、日本におけるパリ外国宣教会の布教の黄金期とってよく、十九世紀末まで多数の若年の宣教師が来日し、現在の日本のカトリック教会の礎を築いている。しかし、人員不足から、各地の信者の司牧を十分に果たすには及ばず、また、日本における物価の高騰は、宣教会の財政を圧迫し、その資金不足は、宣教事業に支障をきたしがちであった。また、カトリックの布教は、開国以来、フランス系宣教会や修道会が独占しておこなってきたため、フランス人の事業とみなされることが多く、彼らの宣教活動は、フランスの対日外交政策の影響も受けることになった。一八九五年の三国干渉の時期から、日本人の対仏感情は悪化し、日露戦争期まで、フランスの宣教師は、時に、ロシア方のスパイとして疑われる、苦しい状況に置かれることになった。日露戦争後、ポーツマス条約への不満を原因として起った日比谷焼打事件では、カトリックでも、本所教会が焼き討ちの対象とな

り、フランス人宣教師や、修道女は、フランス公使館に避難している。教皇使節オコンネルが、日本に派遣されたのは、このような不穏な情勢が過ぎてまもない時期のことであった。

2. オコンネル教皇使節の訪問

教皇が、日露戦争後、アメリカ人の教皇使節を派遣した目的には、第三者の立場にある国の司教であるオコンネルに、日本のカトリック教会の実情を客観的に把握し、イエズス会の再来日の実現と、日本における高等教育機関の設立という、教皇庁がかねてから計画していた構想の妥当性を確認させることが含まれていた¹。オズーフ東京大司教は、パリの宣教会本部からも、教皇庁からも、事前に、使節の日本訪問に関して正式な連絡を受けていなかったといわれる。当時、反教権政策を進めていたフランスは、教皇庁との間で外交関係が断絶しており、フランス政府は、教皇庁付大使を通じて、教皇庁の動向を把握することができず、自国の修道会の利害を守るべく、働きかけることが不可能な状況にあった。パリ外国宣教会のフランス人神父らにとって、この突然の訪問は、教皇庁から、十全な信頼を勝ち得ていないことを示す出来事として受け止められたのではないかと思われ、彼らが、アメリカ人の教皇使節を迎える気持ちには、内心複雑な気持ちがあったと想像される²。

この教皇使節の来日は、日本社会でも関心を呼んでおり、その訪問の真の目的は、様々な憶測をよんでいたが、例えば、『読売新聞』に掲載された記事「羅馬法王使節の使命」（一九〇五年十一月二四日）では、日本のカトリック教会が、フランスの宣教師の管轄下になっているゆえに、布教面で、不利な状況に陥っており、教皇庁がこの事態に対応することが訪問の理由ではないかという意見が紹介されている³。また、カトリック誌の『声』は、『毎日新聞』のある記事が、「羅馬教会と独仏の関係を揣摩し、仏国が古来加特力教の保護に任じたるにも拘わらず、近来教育上の問題より施て倍々羅馬教会と相隔離せむとす、此に於て雄心覇気に富む独逸皇帝は此機を逸せず法皇に接近し其教会保護の任せんとする形勢あり」と報じたことを記し、「吾人其事の実否を保せず」というコメントを付している（「教皇使節と新聞紙」『声』三四八号、一九〇五年、三四—三五頁）。

オコンネルは、滞日中、帝国ホテルに宿をとり、皇居への拝謁、政府高官への訪問、帝国教育会での講演など様々な活動を行っている⁴。使節が帝国ホテルを滞在先にしていたこと

¹ 上智大学史資料集編纂委員会編『上智大学史資料集』補遺、上智大学、一九九三年、四頁。教皇庁の国務長官メリー・デル・ヴァル枢機卿は、オコンネルの日本訪問にあたって、「日本帝国においてカトリックがおかれている状況、将来に期待しうること、カトリックに対して特に指導者階級の間で培われている態度などについて、しかるべき用心をもって慎重にはあるが、できる限り正確にしらべること」という指令を発していた。

² 『パリ外国宣教会年次報告』第三卷、聖母の騎士社、一九九八年、一一九—一二〇頁。

³ 『横浜貿易新報』（一九〇五年一月二八日）の記事「法王使節の使命」は、教皇庁の日本公使館の設置と、英語教育を旨とするカトリック系中学の設立の二つ計画がオコンネルの訪日目的であるとみなしている。高木一雄『日本・ヴァチカン外交史』聖母の騎士社、一九八四年、二七八—二七九頁。

⁴ 「教皇使節の来朝」『声』三四七号、一九〇五年、三二—三五頁。

は、カトリック教会、そして、その保護者を任じていたフランス公使館との一定の距離を置く方策であったのかもしれない。一方で、オコンネルが、滞日中、日本人カトリック信徒と面会することを歓迎していたことは、当時の資料より明らかである⁵。教皇使節は、日本の教会事情を正確に把握するために、彼らの生の声を聞くことが有益であると考えていたのであろう。後に、彼は、自叙伝で、この訪問時に、首相の桂太郎をはじめ、日本の各方面の人々から、カトリックの高等教育機関の設立を望む声や、また、フランス人以外の宣教師や修道会の来日を希望することを聞いたことを書いている⁶。

この教皇使節の来日は、当時の日本人のカトリック信徒にとって、教皇庁が、自分たちの国に強い関心を抱いているということを示す出来事とみなされ、使節の訪問を機に、自分たちの宗教が一般の脚光に浴びることにもなったので、その訪問は、大変、歓迎して受けとめられていた。この訪問中に、教皇使節を歓迎する一般向けの講演会が、東京で催されたが、これを企画したのは、公教青年会に所属する学生の信者たちであった。この公教青年会は、日露戦争が開始直後の一九〇四年二月十四日、暁星中学や、フェラン神父の経営する学生寮に所属する学生信者らを中心に、フェラン神父を総裁、前田長太を会長として、神田教会にて、設立されたものである⁷。オコンネルが日本に到着した時、『時事新報』のある記事（一九〇五年十月三十一日）が、日本の凡ての宗教団体は、ローマ教皇使節を大いに歓迎すべきである、という意見を発表したのに対し、それを読んだ公教青年会の学生らが、その歓迎会を仏教徒やプロテスタントの手で行われたら、カトリック教会の名折れであると立ち上がり、直接、ホテルに滞在する使節に面会を求めて、講演会を実現させたといわれている。学生信者には、パリ外国宣教会の神父らに、この機を利用して、対外向けの一般的な歓迎会を行なう積極的なイニシアチブがあるように見えなかったのであろう⁸。なお、オコンネルを訪問した公教青年会の学生らは、面会時に、彼に意見を求められ、英語又はドイツ語系のカトリック大学を設立するよう進言したといわれる¹⁰。ここで、注目に値するのは、日本人信徒が、教皇使節という、日本のフランス人神父たちより、上位に位置する高位聖職者と出会う機会を利用し、間接的ではあれ、教皇へ直訴するという形で、日本の教会の内部変革を図ろうとしたことである。

この教皇使節歓迎の講演会は、十一月一八日、神田青年会館にて行われ、東京市長の尾崎行雄が祝辞を寄せたなか、オコンネルの他、前田長太、姉崎正治、島田三郎、アーサー・

⁵ 「『日本』新聞の「羅馬法王使僧」を読む」『声』三四八号、一九〇五年。

⁶ 上智大学史資料集編纂委員会編『上智大学史資料集』第一集、上智大学、一九八〇年、四二―四三頁。

⁷ 青山玄「神田教会百年史」『カトリック神田教会百年の歩み』神田教会、一九七四年、四四頁。現在、日本カトリック史では、一般に公教青年会というと、一九一六年に設立され、雑誌『カトリック』や、『公教青年会会報』（後の『日本カトリック新聞』）を発行した青年カトリック団体を指している。前田長太を会長とする、前代の公教青年会のことは、『カトリック大辞典』などにも記載されず、ほぼ忘却されてしまったといえる。

⁸ 彼らは、講演会に大隈重信の引き出しも、図っていたと言われる。『カトリックタイムス』（一一八号、一九二六年九月一日）

⁹ 鈴木習之『神の国の侍たち』カタリナ出版社、一九六二年、一四九頁。

¹⁰ 鈴木習之『光ありき』中央出版社、一九五三年、一二〇頁。

ロイドなどの講演が行われている¹¹。この講演会は、多くの聴衆を集めて、プロテスタントに対して、劣等意識を持っていた日本人の若手神父や学生信徒に、自信と満足を与えることができたが、この出来事は、信者らの自主的な活動によって、教皇使節の歓迎会が実現されたという点で、日本のカトリック史の上で、画期的な意義があったといえる。青年知識人層の信徒の運動に期待を寄せていたフェラン神父は、フランスの宣教公布会の機関紙に、「このような前例のない大成功は、私のカトリックの学生たちのイニシアチブと献身によって、実現されたのです」と報告している¹²。一方、プロテスタントの知名人まで、教皇使節の講演会に呼びよせた日本人信徒に対して、反発を覚えていたであろう者が、パリ外国宣教会に少なからずいた可能性は、十分考えられるが、使節の来日中、彼らは、その動きに対して、なすすべもなかったのであろう。

事がここで終わっていたら、日本のカトリック教会にとってこの使節の訪問は、一つの記念碑的出来事として終わっていたことに間違いはないが、その帰国後、日本人神父の前田長太が、自身の発行する雑誌で、教皇使節の来日を論じた記事が、教会内で否定的な反響を呼ぶことになってしまった。次に、われわれは、前田長太の活動とこの「前田事件」の波紋をうかがうことにしよう。

3. 前田長太と『通俗宗教談』

I. 『通俗宗教談』

前田長太（一八六七一—一九三九）は、東京大司教区で、最初に日本人として司祭職についた神父である。新潟の神官の家庭に生まれたが、十一才の時、父親が、ドルアール・ド・レゼー神父から、洗礼を受けたとき、彼も同じく、受洗している¹³。この後、神学校で学び、一八九一年に助祭になり、一八九四年、司祭に叙階された。彼は、東京大司教区の代表する日本人の神父として、師のリギョール神父の出版事業を助けて、その著書を多数、翻訳する一方、自身も各種の雑誌に健筆を振るい、講演活動もおこなった明治カトリック教会における代表的論客であった¹⁴。しかし、彼は、一九〇七年に還俗して、布教活動から離れ、後に慶応大学の予科教授となり、生涯をおえている。

現在までの日本カトリック史研究では、この前田長太の教会人としての活動が主題的に取り上げられることはなかった。しかし、われわれは、この前田長太の活動を通して、二〇世紀初頭のカトリック教会における日本人カトリック信徒の一つの典型的な考えをうかがうことができると考える。

前田は、一九〇三年六月、カトリックの月刊誌『通俗宗教談』を個人誌として、月刊で

¹¹ この講演会の講演は、『新理想』六号（一九〇六年一月）の付録として、活字化された。

¹² Ferrand, Claudis., « Le Délégué du Saint-Père et l'empereur du Japon », *Annales de la Propagation de la foi*, 1906, p.153-154.

¹³ 青山玄「(一) カトリック教会による宣教の開始」新潟県プロテスタント史研究会編『新潟県キリスト教史』上巻、新潟日報事業社出版部、一九九四年、三六頁。

¹⁴ 青山玄「明治のカトリック愛知・岐阜県布教(八)」『布教』、二六巻、第三号、一九七二年。

発行を開始した。すでに東京大司教区には、『声』が、機関誌として発行されており、前田も、一時、編集に協力し、記事を寄稿していたが、ある「事情の下に「声」と全く絶縁して」、『通俗宗教談』の刊行を決意したらしい¹⁵。その事情は詳らかではないが、『声』主幹のルモアヌ神父と前田との間で、編集方針を巡って、意見の衝突が存在したのであろう。前田が、『通俗宗教談』の中で、「個人誌」であり、「教会とはなんら関係がない」と強調するのも、教会内で正統的な位置を占める雑誌の『声』との軋轢を避けるためであったと思われる。前田は、『声』を敵視していたわけではなく、「余輩が退社してからは、有力能文の記者が入社して、近頃は時々名文章が見受けられる」とエールを送っているように、様々な個性をもつカトリック雑誌が並存する状態を理想と考えていたのであろう¹⁶。

この前田の個人誌には、前田の師であるリギョールをはじめ、ツルペン、L・バレ、フェランなどの神父が寄稿しており、また、東京大司教区から、宣教会パリ本部に送られた『年次報告』に、『通俗宗教談』が、『声』と並んで、好意的に紹介されていることからみて、この雑誌が、教会内で存在を正式に認められていたことは明らかである¹⁷。しかし、また、この『通俗宗教談』は、前田の個人編集になる雑誌であり、教会の検閲を受けていなかったため、彼や他の日本人カトリック信徒の意見が直裁に表明されていることも多く、当時の日本人のカトリック神父の意見を知る上で、好個の材料を提供している。

この個人雑誌の「雑誌瞥見」欄（二三号、一九〇四年一二月）に、前田は、『聖書の研究』、『新人』、『六合雑誌』などのプロテスタン系雑誌への好意的批評を掲載しており、彼にはカトリック教会外の知識人と知的交流を図る意図のあったことがうかがえる。もっとも、このような編集方針をもつカトリック雑誌の出版は、パリ外国宣教会の一部の幹部には、警戒感を与えていたとも考えられる。当時、『声』の編集などに従事していたある日本人伝道士は、後の回想記事で、彼が、布教の参考にするため、他宗教の教界事情を『声』で紹介したところ、「一部の読者には頗る歓迎された」が、一方で、「枢要部の方々から」、すなわちパリ外国宣教会の宣教師たちから、カトリックの雑誌で、神道や仏教、プロテスタントの宣伝をすることは何事かと、「しばしば煩さい非難と苦い悪罵とを浴びせられ」と回想している¹⁸。恐らく、このようなカトリック以外の宗教を認めないフランス人神父らの排他的な批判感情は、プロテスタントの雑誌に対しても好意的な姿勢をとる『通俗宗教談』にも向けられていたのに違いない。

前田は、刊行一年後の『通俗宗教談』の記事で、予想外に購読者に恵まれていると書いていることから、この雑誌は、教会内の一部で関心を集めることに成功していたと思われる。

¹⁵ 工藤鷲馬『『声』の過去二五年』『声』五〇〇号、一九一七年七月、六五頁。ただ、『声』は、『通俗宗教談』の発刊予告を掲載しており、表向きであれ、編集部は、前田の個人雑誌の刊行を祝する態度を取ったようである。もっとも、管見の限り、『声』は、『通俗宗教談』の刊行中、この雑誌に言及することはなかった。

¹⁶ 「教界の雑誌」『通俗宗教談』三四号、一九〇五年八月、四三頁。

¹⁷ 『パリ外国宣教会年次報告』第三卷、聖母の騎士社、一九九八年、七四、一〇〇頁。

¹⁸ 工藤鷲馬、前掲論文、六五頁。ここで工藤のいう、「一部の読者」とは、恐らく、カトリック雑誌の開かれた姿勢を歓迎する、若手の日本人神学生や信者が主ではなかったであろうか。

る。当時、上海に留学中であったイエズス会の土橋八千太（後の上智大学教授）は、洋雑誌の既刊一年分を前田に寄贈している¹⁹。また、後に日本人初の司教となる早坂久之助は、留学先のローマから、滞在記を寄せており、次代を担う若手の神学生からも、支持を受けていたことが確認できる²⁰。

当時の東京大司教区で、『通俗宗教談』に寄稿しているフランス人神父らは、また同時に学生向けのカトリック雑誌『新理想』を出版、または同誌に論文を寄稿していたメンバーである。彼らは、知的な欲求を持つ学生信者の気持ちをよく理解し、日本の教会の発展に彼らの力が不可欠だと判断する、教会内の進歩派に位置していた。当時、フェラン神父の発行した仏文の小冊子に、『日本宣教に関する一宣教師の考察』というものがあり、出版活動と青年運動の重要性が語られているが、末尾に、前田長太の神父宛のフランス語書簡を所収していることから明らかな通り、前田とフェラン神父は、宣教方法において、同意見を持つ同志であった。この書簡で、前田は、従来のカトリック教会の活動で、慈善事業や、教会の建設に力が入れられることが多い反面、知識人向けの出版事業が等閑に付されていることに異議を唱えていた²¹。

日露戦争の渦中、前田は、『通俗宗教談』（一五号、一九〇四年九月）の巻頭社説で、「戦時の伝道私議」、「戦後の伝道私議」を掲載している。後者の「戦後の伝道私議」という論文は、日本が、将来、戦争に勝利するということを前提に、未来の戦勝国日本を舞台に、カトリックの宣教方法に関して、彼が、理想論を展開したものであり、彼の宣教観を知る上で、大変、注目し得るものである。これは、日本人伝道者に与える、宣教方法に関する改革的私案と断っているが、レトリックに隠れて、明らかにパリ外国宣教会の従来の宣教方法に批判を向けた文書である。

「日露戦争は布教伝道の上に一大変動、一大革命を来たすであろう」という冒頭の文章に示されるように、前田は、日本が、西洋に伍す文明大国になった現在、カトリック教会は、近代国家の国民に適した布教方法を採用しなければいけないという考えをもっていた。前田は、日本のような近代化を果たした国で布教を担当する人物は、文明的に劣った他の国における宣教師の同様のやり方で、宣教することはもはや許されないと主張し、日本で宣教をする人物に、学殖と、人格の二つを高く備えていることを求めている。これは、裏を返せば、彼が、来日した宣教師の大部分に学問の造詣が、不十分であるという不満をいだき、また、フランス人宣教師の態度に、時には、日本人を見下すような面が存在することを敏感に感じとっていたことを意味する。前田が、このような発言をレトリックに隠れてではあれ、日露戦争期に、展開するに至ったのは、彼もまた、日本が西洋列強と並びつつある近代国になったのだという、ナショナリズム的感情につき動かされていたためである

¹⁹ 「編集室より」『通俗宗教談』二九号、一九〇五年四月、四三頁。

²⁰ 「秋四千里」同上、三八号、一九〇五年一二月。「羅馬だより」同上、四〇号、一九〇六年二月。

²¹ Ferrand, Claudis., *Idées d'un missionnaire sur l'Évangélisation du Japon*, Tokyo, 1905.

う。

「伝道者たるものは、露国を打撃し来たれる戦勝国民に布教伝道すと云うことを造次にも顛肺にも忘れてはいかぬ、又正義人道の為に行動し来れる文明国民に布教伝道するのであると云う事を深く脳里に印しなければならぬ。」

「日本人を使役する為に渡来し、信者を支配する為に教職に就くと云うような心事行跡もし之ありとすれば、確かに是れ宣教師伝道者の必須なる一資格を失って居るものである。」

「使役主義の伝道は断じて不可、『由らしむべし主義』の伝道も断じて不可、即ち弟子の足を洗うほどの謙遜と一世の敬服に値するほどの学殖を以て布教伝道に従事しなければ、日本国民は明らかに布教者伝道者の腹の中を見透かして決して頭を下げない、心服はしない、蓋し出来ぬのである。」

パリ外国宣教会の指導下にある教会で、直接、宣教師に対して、批判を展開することは不可能なことであった。彼は、自身の批判が、日本人神父や伝道者にのみ向けられた提言で、外国人宣教師には当てはまらないと繰り返すことによって、逆に、宣教師が真の批判対象であること読者に悟らせるという筆法を取っている。

「吾人は幸いにして外国より渡来せる宣教師方が何れも皆謙遜深くして、人を事うよりも人に使えられる心事あるを見て日頃感嘆敬服して居る者であるから、外国宣教師方に就いては、この私議は殆ど、無用であろうと思う。」

しかし、これらの外国人宣教師観が、方便であったことは、前田が、この約三十年後、昭和初期におこなわれた回想で、昭和期のカトリック教会に触れて、「外国宣教師は徐々に引き揚げることになり、今後渡来するものは、科学的知識ある者でなければならぬなどと云っている」と書き、自らの先見の明を誇っている文章から明らかである²²。

この『通俗宗教談』で、前田が、日本のカトリック教会で例外的に学殖のある神父として、特権的に扱っていたのが、自分の師であるリギョールであった。このフランス人宣教師は、総計約八十冊の著書を日本で出版し、明治カトリック教会の出版物伝道で、大変、功績の大きかった宣教師である。

「リギョール師は本邦在留の宣教師中最も日本の思想界を洞察するの明ある学者である。」
（「リギョール師の『新興國に於ける現在将来の宣教師資格論』」『通俗宗教談』二八号、一九〇五年四月）

²² 「はしがき」リギョール、前田長太訳『秘密結社』高原書店、一九三四年。

「教会では未だ其価値を認められて居らぬかも知れぬが、世間では至る処博士として之を歓迎し、日本の公教会はリギョル博士独力で背負って居ると評して居る、成程知識界の方面よりみれば、公教会の世間に知られたるは、主としてリギョル博士の手柄である。」（「教界の雑誌」同上、三四号、一九〇五年九月）

前田は、同趣旨の発言を、他の記事の中でも繰り返しているが、自分の師を特権化する彼の態度に、快く思わなかったものが、周囲の宣教師に多かったであろうことは、想像に難くない。

II. オコンネル教皇使節と前田長太

オコンネル司教の滞日中、前田は、単身で帝国ホテルに面会を求めて、歓待を受け、その後も、彼をしばしば訪問していたという。前田は、フランス語に通じた教会人として、当時、反教権主義を強めるフランス政府と教会の対立関係や、フランス政府と教皇庁の関係の悪化など、西洋の教会情勢に通じていたことは想像に難くないが、そのため、教皇使節のフランス人宣教師への距離を置いた対応から、その訪問の隠れた目的をたやすく察知しえたのではないと思われる。オコンネルにとっても、前田は、日本のカトリック教会の内情に精通し、かつ、フランス人宣教師の利害に関わらない現地人神父という点で、情報提供者として格好の人物に思えたはずである。前田は、大日本帝国教育会で行われたオコンネルの講演で、通訳を務めているが、同会における講演の実現に働き掛けたのは、前田であると思われ、彼が、教皇使節から、一定の信頼を受けていたことは明らかである。

恐らく、前田は、教皇使節から親しい応対を受け、気分が昂揚していたのであろう。オコンネルが訪問を終えて、帰国した後、『通俗宗教談』三八号（一九〇五年一二月）に掲載された社説「日本社会と教皇使節」で、教皇使節の来日が、社会の耳目を集めたことを指摘し、下層階級を対象にした慈善事業を中心とする宣教から、出版物を利用して、知識人を主な相手とする宣教方法への転換の必要性を堂々と主張している。

「宗教は学問にあらず、布教は灌学にあらざるが故に、学界の方面はどうでもよいような訳ではあるが、然し老幼婦女を済度するばかりが布教の主意でもなければ、不幸薄命者を救う許りが宣教者の能事でもあらざるべければ、今後は日本の学者社会、上流社会の方にも手を出したならば、如何かと思うのである。」

『数の多き割合に世の耳目に触れぬ』と云はれた日本のカトリック教会は、唯一人のオコンネル司教の閣下のために忽ち世の耳目にふれるようになったと云はねばならぬ、兎に角オコンネル司教閣下の来朝は記者の予想に反し（恐らくは幾多宣教師の予想に反し

て?) 我が日本公教会の為に、新紀元を開いたと言っても、過当溢美の言ではあるまい。記者は今日まで同教宣教師達が刻苦精励二三十年に及びても獲得すること出来なかった所、施設閣下は来朝早々一挙にして之を獲得したと断ずるに憚らぬものである。」

発表後、まもなく、この論文は、前田に無断のうちに仏訳され、差出人も差出所も不明の状態、各地の宣教師のもとに送付され、教会は、「物議騒然」になった。前田を「離教者」と断ずる者もあったという。『通俗宗教談』三九号（一九〇六年一月号）で、リギョールが、弟子の論文の不備を指摘して、事態の收拾を図り、前田自身も、自身の不徳を詫びて、誌面の刷新を宣言したが、時すでに遅く、次号の四十号が、終刊号となった。「廃刊の辞」で、「廃刊の理由は諸君も既に推されることと思います。私からは、之を説明せぬ方が却って徳義に背かぬことと存じます」（『通俗宗教談』四〇号（一九〇六年二月号））と前田は、書いている。

この問題になった前田論文の翻訳それ自体は、正確な仏訳であり、内容を曲げているわけではないが、前田は、教会関係者の何物かが画策して、前田自身が送付したかのように装った、その行為の卑劣を非難している。覆面の送付者は、受け取った宣教師が、読後に、前田論文に対して、反感を持つことを想定していた確信犯的行為であったことは、間違いない。この論文は、リギョール神父とフェラン神父らの一部の宣教師がおこなう知識人向けの教会事業のみを高く評価し、今までの教会の布教事業が、下層階級向けの慈善事業に偏りがちだったことを批判するものであったので、大方の宣教師らの反感を買うことは必定であったろう。また、前田は、この論文で、自分が教皇使節に知遇をえたこと、そして、「お前が羅馬教皇陛下に直接日本の教勢及び今回我を歓迎したる状況等を申し上げろ」と薦められたことを書いているので、この論文の読者は、前田が、彼の意見を、教皇使節を通して、ローマ教皇に伝わるように話したと思わざるを得なかったと思われる。

当時、この事件がフランス人聖職者側にどのように受け止められていたかについて、一九〇六年初頭、日本のマリア会の活動の視察のために、来日していたマリア会総次長のシャルル・クロップの残した資料が参考になる。フランスの男子修道会のマリア会は、パリ外国宣教会の依頼で、一八八八年に来日し、東京の暁星学院をはじめ、長崎や大阪、横浜で、男子の初等・中等教育に従事していたが、イエズス会の来日計画は、彼らにとって、軌道に乗りつつある彼らの教育事業の強力な競合相手の出現として、警戒されていた²³。クロップは、来日中、各地のマリア会士らから、事情報告を受けるなか、前田の行動に関しても話を聞いていたらしく、日本に関する報告文書で、日本のカトリック教会の実情に通じないオCONNELの報告によって、不正確な情報が、教皇庁に伝わることを懸念し、日本の教会事情に関して間違った観念を教皇使節に吹き込んだ元凶として、前田の行動を非難している。また、日露戦争当時、日本のプロテスタントの各教派では、ナショナリズムの意識が高揚して、外国ミッションからの独立自給の傾向が強まっていたが、前田ら日本人

²³ 『マリア会日本渡来八〇年』マリア会出版部、一九六八年、九九一—一〇〇頁。

カトリック信徒の教皇使節に対する対応は、このような日本人プロテスタントの動向に対応するような、日本人の外国宣教師に対する反抗の動きとみなされ、日本近代のカトリック教会を築きあげてきたフランス人宣教師に対する背信行為として、非難されている。

一九〇八年に、教皇庁の命のもと、イエズス会が来日したとき、日本の教会は、あげて歓迎している。しかし、フランス人宣教師らは、教皇庁が、自分たちの宣教への献身を軽視しているという印象をぬぐえなかったのではないであろうか。そして、その反感は、オコンネルの訪問時、彼に意見を具申した日本人信徒に向けられたに違いない。彼らが、フランスの宣教会が築きあげてきた教会の中から、育ってきただけに、その「不正確な情報を与えた」行為は、忘恩と受けとめられずにはおこななかったであろう。

4. 「前田事件」以後

この前田の筆禍事件は、教会内の不祥事であるために公にはされなかったが、教会関係者の間に与えたショックは大きかったと思われる。青年会の演説会が、一時期、「種々なる事情に制せられて、暫らく中止」（『育英塾彙報』『新理想』八号（一九〇六年三月））になっていたことは、恐らく青年会活動に危惧を抱いていた教会関係者の措置であったと考えられる。

以降、カトリック教会内で、宗教関係の出版物の検閲委員会が設けられることになったことをはじめ、「前田事件」の余波は、様々な面であらわれていることが、各種の資料によって、確認できる。前田が還俗した経緯はわからないが、この出来事により、彼を取り巻く環境が悪化し、教会内で居場所のなくなったことを悟らざるをえなかったからであろう。また、彼の師のリギョール神父も、前田というかけがえのない協力者を失い、その知識人向けの活発な啓蒙活動は、低調になってしまう。フェラン神父が、出版していた学生向けのカトリック雑誌『新理想』は、一九〇七年四月に終刊を余儀なくさせられてしまった。

教会を離れた後、慶応大学の教授として、後世を送った前田であるが、知識人に向けた布教を重視する彼の考えが、当時の教会指導者に理解されなかったことは、後々まで苦い思い出として、心に残っていたらしく、約三十年後になされた回想で、「今は俗人になりさがり、宗教界から見たならば、墮落した人間のように見られているだろう」と卑下しつつも、明治期に自分とリギョール神父が行った出版物布教に理解の少なかった教会上層部の「近眼者流」に無念の気持ちを漏らしている²⁴。

東京大司教区では、『通俗宗教談』、『新理想』の廃刊以降、知識人向けの雑誌の刊行は、長らく行われなかったが、恐らく、それはパリ外国宣教会の宣教師の間で、知的志向の強いカトリック雑誌の発行が、教会内の若手信者に対し、コントロールを失ってしまう事態を招きかねないという警戒感があったためではないだろうか。『声』編集長のスタイシェン神父は、「我青年諸子の希望に答ふ（本誌内容の改良に就て）」（『声』五一〇号、一九一八

²⁴ 「はしがき」リギョール、前田長太訳『秘密結社』高原書店、一九三四年。

年五月) という記事で、知識階級の青年信徒が、研究雑誌の発刊を願う気持ちに理解を示しながら、そのことによって知識欲にとらわれて、宗教上の信仰を損ない、その実行を顧みなくなることへの危惧の念を表している。また、「青年会の発展策」(『声』五一七号、一九一八年一二月) という記事では、今までの青年会が短期間でつぶれたのは、日本の青年信徒に「愛徳」の念に欠けていたためとの解釈を示し、青年信者が、カトリック信徒でありながら、日本人の特徴的性格たる「嫉妬」、「陰謀」という病的精神を全く脱却していないことを指摘している。

一九一六年、新しく結成された第二次公教青年会は、海軍軍人の会長山本信次郎の指導と庇護のもと、発展していったが、後の回想で、山本は、この青年会が、「教会革命児の卵の集り」のごとくみられ、「無理解なる信者其の他意外の方面よりの直接間接妨害圧迫等を蒙」ったことを記している²⁵。「意外の方面」とは、教会を指導するフランス人司祭らに他ならないであろう。これらの知識人信徒主体の青年運動が、かくまで教会のフランス人神父から警戒された原因の一つは、前田事件の苦い思い出が関わっていたからではないだろうか。明治後期から、大正期にかけて、日本人カトリック者の知識人活動が、教会内で、必ずしも歓迎されなかったことは、教会の発展にとって、好ましいことではなかったと思われるが、日露戦争後まもない時期におきたこの事件は、フランス人宣教師に、知識人向けの宣教や、青年運動に対し、不信感を与えたという点で、それ以降の教会の歴史にも、一定の暗い影を投げかけたことは間違いないように思われる。

²⁵ 山本信次郎「カトリック誌の過去を顧みて」『カトリック』第一四巻第一号、一九三三年一月。